楽

園

第一章　亡き子を偲ぶ歌

二〇〇五年五月の中旬、昼下がりのことである。ＪＲ浅草橋駅近くの路上を、小柄な女性が歩いていた。

節句人形の老舗店舗があることで有名な町であり、衣類や雑貨の問屋も多いこのあたりには、日中、そこで働く人びとが大勢いる。若い女性も目立つ。が、一人歩きのその女性は、明らかにその種の人ではなかった。どこか他所の土地から、おそらくは初めてここを訪れ、不慣れな道筋に戸惑いながら、目的の場所を探している。

年齢は五十代半ばだろう。「彼女」という呼称より、「婦人」と呼んだ方がふさわしい。

たっぷりした長袖のブラウスを着て、胸のボタンは襟元まできっちり留めてある。灰色のスラックスと、古風というよりはいささか野暮ったいデザインの黒いベルト。ふっくらした体型なので、ベルトにはあまり余裕がない。足元は履き古した運動靴で、靴紐はよれよれだ。

左肩に、がま口を大きくしたような形の黒い鞄を提げている。右手には紙袋を持ち、白い紙切れを握っている。目的地への地図か、道順のメモのようなものらしい。ときどきちらちらと目を落としては、ぐるりの景色を確かめ、ビルの看板を見上げ、住居表示を探している。

ガード沿いの道をとぼとぼ歩く彼女の後ろから、空車のランプを灯したタクシーが来た。道の

真ん中で、手元の紙切れに見入っていた婦人は、小さくクラクションを鳴らされて、あわてて端へと避けた。ゆっくり通り過ぎるタクシーの運転手は、サングラスをかけている。今日は、五月に入ってからもう何度目の夏日だろう。

小柄な婦人はがま口型のバッグをぱちりと開け、ハンカチを取り出して、額と鼻筋を拭った。眩しそうにまばたきをする小さな目は、象のように温和で優しげだ。

――象ってね、野生のときでも、人間に飼い馴らされてからも、目つきが変わらないんだよ。ずっとああいう、穏やかな目をしてるんだよ。それは知性があるからなんだ。そんな動物、ほかにはいないんだって。

何年か前、婦人の一人息子がそんなふうに言ったことがある。息子の友達が、「おまえの母ちゃん、象みたいだな」とからかったのを受けての言葉だ。その友達は、婦人の目の優しさを褒めたわけではなかった。象みたいに太っていて鈍重だという意味で、意地悪くからかったのだ。それでも婦人の息子は、笑顔で、いっそ誇るようにそう切り返したのだった。

自信なさげな足取りで歩き出す婦人の姿は、確かにもっそりとしていて、丸っこくて、おとなしい子象のようだった。すれ違う人びとに、この女性はどんな人だと思いますかと質問を投げたなら、誰もがちょっと考えて、「とにかく、どこかの誰かのお母さん」と答えることだろう。それ以外の職種や立場や肩書きを、思い浮かべることは難しい。

その答えは正しい。ただ、この婦人の一人息子はすでに世を去っている。

駅の改札を出てから三十分以上かかって、小柄な婦人はようやく目的の場所を見つけた。手元のメモをもう一度見る。「ミモザビル」間違いない。ここの三階だ。

こぢんまりした五階建てのビルだった。テナントビルだが、出入り口の脇に掲げられた案内板

には、五つのスペースがあるにもかかわらず、三つしか表示が出ていない。薄汚れた扉のエレベータは、外来者の目につきにくい奥まった位置にあり、気づかなかった婦人は外階段を登った。壁に手をつき身体を支えながら、一歩一歩膝を持ち上げる歩き方に、健康状態が表れていた。膝の関節痛が、この人の持病だ。

三階の狭い踊り場で、婦人は呼吸を整え汗を拭いた。紙袋をいったん足元に置き、身なりをざっと点検する。髪を撫でつける。そして灰色のペンキがまだらに剝げたスチールドアを見上げ、インターフォンを押した。

ここのドアの脇にも、社名か表札を掲げるための枠が設けてある。「有限会社ノアエディション」とある。ドアの開閉の邪魔にならないところに、蓋のついた大きなゴミ箱が据えてあって、このゴミ箱の横腹にも、手書きの注意書きが貼り付けてあった。

〈ポストに入らない郵便物はここに入れてください〉

訪ねてきた婦人は、インターフォンに応答がくるまでのあいだ、その表示とゴミ箱を興味深く眺めた。

はい、と応じる声がして、ドアがゆっくり開いた。訪ねて来た婦人は、丸い背中をいっそう丸くして、丁寧に頭を下げる。

「萩谷さんでしょうか」

ドアを開け、声をかけたのは、四十歳前後の女性である。女性にしては長身、半袖シャツにジーンズ、長い髪をくしゃくしゃにまとめて頭の後ろで留めている。化粧っけもなく、足元はスリッパ履きだ。

「はい、萩谷でございます。お約束の時間に遅れまして、すみません」

いえお気になさらずと呟いて、長身の女性はさらにドアを開き、子象のような婦人を招き入れた。土足のままでどうぞと言われても、婦人は思わず爪先立ちになった。床の掃除が行き届いていたから。

室内には書架と書籍と新聞と雑誌、さらに、知識のない婦人にはわからなかったが、書籍や雑誌の製造過程にあるものが溢れていた。大きな机が五つ見えたが、そのうちの二つばかりはただ物を載せる台として使われているようだった。室内は外から想像するよりも広く、窓が大きくて明るい。パソコンのモニターが光っている。応対に出てきた女性以外のここの居住者もしくは使用者は、今は出かけているのか姿が見えない。

部屋の一角の簡素な応接セットに、二人は向き合って腰をおろした。婦人は持参した紙袋から菓子折を取り出すと、礼と詫びを繰り返した。

頭を下げながら、象のような目をちまちまとまばたく。汗がしみるからではなく、瞳が潤んでいるのだった。

話は一週間前に遡る。

ここ「有限会社ノアエディション」で働く前畑滋子のもとに、ある雑誌社から電話がかかってきた。田口という、滋子よりやや年下の編集者だ。昔の知り合いで、滋子が仕事を再開したことで付き合いが戻り、挨拶程度の間柄にはなったけれど、それでどうということもない。互いの連絡先を知ってはいるが用はないというくらいの、この業界にはありふれた関係だった。

「ちょっとお願いがあるんですよ。うちの仕事じゃないんだけど、う〜ん、でもうちの仕事なのか」

人に会って話を聞いてあげてほしい、というのだった。
彼の作っている雑誌は女性誌でも男性誌でもなく、総合誌でもない。コンセプトは「二十代から三十代の、東京人のための情報誌」だ。女性誌ではないからファッション情報は扱わず、男性誌ではないからエロティックな要素は抜き。それ以外のものなら何でも来い。ただし論壇誌みたいな硬いことは言わないよ、だ。
創刊の際には、読者の性別を選ばない日本で唯一の雑誌と謳ったが、その程度の斬新さでは、巷に溢れる雑誌やフリーペーパーのなかから抜きん出ることは難しい。部数はジリ貧で、正直いって、電話をもらったとき、滋子は、ああまだ出てたんだと思った。
「それってつまり、インタビューですか？」
「説明が難しいんだけど」
田口は笑ったような声を出す。
「強いていうならそうなのかなあ。とにかく、うちじゃ何ともしようがないんだけど、ひょっとして前畑さんならこの人の力になってあげられるかもしれないって思ったんですよ」
事件ものなんです、という。
滋子のライター暦は長い。その大半を、女性ライターらしい家庭もの、教育もの、ファッション、旅行などを素材とした記事を書くことで過ごしてきた。得意としてきたのは職業もので、全国の伝統工芸の職人たちを訪ね歩いたシリーズは、自分でも満足する出来の仕事になった。単行本化を薦められたほどだ。
そのまま進めば、今ごろ滋子は、その単行本だけでなく、他にもいくつか、ささやかながらまとまった著作を持っていたかもしれない。ノンフィクション作家と呼ばれることはなくとも、本

が売れる見込みもなくとも、業界では「安定した仕事をするライター」として実績を積み、信用を勝ち得ていたことだろう。
その流れが、十年前、たったひとつの事件に関わったことで、変わった。
そう、「たったひとつ」だ。だが、この主に女性を標的とした連続誘拐殺人事件に、犠牲者は両手の指に余るほどいた。あまりにも多くの命が奪われ、生き残った者たちも深く傷ついた。滋子はこの事件に、一時は被害者の側に、また一時は殺人者の側に、最後には告発者の側に立って深く関わり、事件の収束に立ち会うことができたのだが、それと引き換えに、容易に立ち直ることのできないダメージを負ってしまったのだった。
そうなったのは、誰のせいでもない。自分の軽率さ、不勉強、不用意なアプローチが原因だ。よくわかっていた。誰に責められなくても、滋子は自分で自分を責めた。
書き続けるように、励ましてくれる人びともいた。そのなかの一人で、もっとも強力な応援者が、滋子の夫の前畑昭二である。夫との絆も、連続殺人事件の渦中にあるとき、一度は断たれかけた。かろうじて繋ぎとめたとき、その絆は以前より強くなっていた。が、そんな夫の声でさえ、滋子を奮い立たせることはできなかったのだ。
事件もの、犯罪ものにさえ手を出さなければいいんじゃないか、もっと気楽に考えろと、忠告してくれる人もいた。一度の手痛い失敗で、すべてを捨てることはないという助言もあった。逆に、書くことをやめてしまうのは敵前逃亡だという厳しい叱責も受けた。連続殺人犯は司法の手に引き渡され、公判が始まっている。それを追いかけ、つぶさに見て、聞いて、書き残してゆくことこそが、あなたのできる最善の謝罪だ。責任の取り方だと。
どちらの意見にも、滋子は従うことができなかった。

試みはした。何度もしたのだ。が、事件ものであれ何であれ、あるいは「本丸」の公判傍聴記であれ、そもそも書くことができなくなっていた。滋子は怖気づいていた。自分で意識している以上に、深いところから臆病風に吹かれていた。

公判には、証人として出廷を求められたとき以外、足を運んでいない。幸か不幸か、滋子が出廷した日の公判では、被告人は開廷早々に不規則発言を繰り返し、判事に退廷を命じられていた。それでも、空っぽの被告人席に気配を感じ、滋子は証言の途中、何度か吐きそうになった。足が震えて、立っているのさえやっとだった。

負けた。もう回復はない。叱られても励まされても、もう駄目だ。自分の仕事は終わった。あとは良き妻良き嫁、そして良き母になって生きていこう。無責任かもしれない。いくじなしだ。それでいい。甘んじてすべての批判を受けよう。わたしはもう終わってしまったのだ。どうしようもない——。

しかし、自分の人生であっても、決心さえすれば全部そのとおりになるわけではない。夫婦仲は円満に安定しているのに、子供には恵まれなかった。不妊治療にも通ったが、結果が出ない。そのうち、高齢の夫の両親があいついで死病に倒れ、わずかな要介護の時期を経ただけで亡くなり、家業を継いでいる夫は社長の責務を負って、忙しくなった。それまで夫の会社を手伝ったことのなかった滋子は、今さら一緒に働こうかと思っても、アルバイトの事務員より役に立たない。

ぽつねんと、夫の帰りを待って家事をするだけの毎日になった。

時間が余り、無為を持て余すようになると、少しずつ少しずつ、（また仕事をしたい）という気持ちが湧き上がってきた。何とムシのいい話だ。さんざん責任を回避して逃げ回ってきたのに、今さら何だ。時間が経ってほとぼりが冷めたら、もういいかと思い始めたって？　冗談じゃない。

甘ったれるな。

怒鳴られ嗤われるに決まってる。またライターに戻りたいなんて言い出したって、誰が仕事なんかくれるもんか。半ば自棄のようになって、どうせ断られるんだからいいじゃないかといくつかあたってみると、驚いたことに、歓迎された。

「長くかかったね。でも、よかった。お帰り」

そんな言葉も贈ってもらった。

「これからだって、ずっと苦しいだろうと思うよ。シゲちゃん、あの事件のことは一生抱えていかなくちゃならない。それは誰も代わってあげられないしね。でも、何か書くって仕事は、そういう業を背負うものだからさ。シゲちゃんほど派手で目立ちはしなくても、みんな同じだからね」

ライター仕事を再開したいと思う——と言い出すと、夫も喜んでくれた。それでいいんだ、滋子はそれでいい、と。

「俺はおまえほど頭よくねぇから、上手く言えないけど」

両親を失い、めっきり白髪が目立つようになった五分刈り頭をごりごりかきながら、彼は言った。

「滋子はさ、いつかきっと、もういっぺんあの事件と向き合わなくちゃならないんだろうと思うよ。でも、それは期限があるもんじゃないって気がする。滋子がずっとライターやりながら生きてって、そンで寿命が尽きる迄には、あの事件を書けないかもしれない。だけどさ、書いてりゃ、そこに向かってることにはなるじゃんか。それでいいんだよ。それなら、逃げてることにはならないんじゃねえかと、俺は思うんだ」

そしてあわてて、顔を赤くして付け足した。
「だからって、あの事件のこと忘れるなっていうわけじゃないんだ。忘れたっていいんだ。こだわれって言ってるわけじゃないんだ。ライターって仕事は滋子が好きな仕事なんだから、またやればいい。何も考えなくていいって。な？」
事件の渦中の壮絶な夫婦喧嘩のときとも、その和解のときとも、思いがけず早く舅と姑を見送ったときとも違う種類の涙を、滋子はちょっぴり流した。
そういえばこの人は、あの事件の直後もこう言ってくれたっけ。滋子には滋子にやれることがある。やるべきことがあってやれるなら、やれよ。やらなきゃ女がすたるだろう。
最初のうちは仕事量もたかが知れていたので、家で書いていた。昨今急速に伸びている広告系フリーペーパーの仕事で、気も楽だった。さすがに大手の雑誌から声はかからなかったし、滋子の方でも行く気はなかった。
そのうちに、フリペ専門の編集プロダクションをやっている友人から、うちと専属契約してくれないかと誘われた。滋子はふたつ返事で承諾し、ここ「有限会社ノアエディション」に机を持つ身になった。それが三年前のことだ。
フリペといっても、バカにしたものではない。新製品のパブリシティもやれば、人物インタビューもやる。広告系だから、滋子がかつて得意としていた職業ものの蓄積が役に立ち、今では名指しで依頼が来ることもある。
名刺を出した際、「ひょっとしてあの前畑さんですか」と問われることは、今ではほとんどない。流れの速い現代社会のことだから、そもそもあれだけの大事件の記憶さえ薄れている。滋子は主役ではなく脇役で、しかもとんだ道化モノだった。こちらで意識するほどには、世間はもう滋子

を見ていない。とっくの昔に目を切っていたのだった。
あの事件の公判の、一審は六年がかりで結審した。死刑判決だった。もちろんそれで終わるわけはない。被告人が控訴し、現在は高裁での審議が続いている。めったに報道されなくなったけれど、一審判決の後、被告人の拘禁反応が重くなり、医療的な対処が検討されている旨の記事が、スクープ扱いで出たことがあった。
初公判当時の騒乱は別として、その後滋子が主婦業に専念している時期でも、ライターとして始動したころにも、時折思い出したように記者やルポライターが接触してきて、「書け」というのではなく、滋子を取材したがることがあった。どんなケースでも丁寧に断ってきたのだが、ノアエディションに落ち着いてから、ひとつ変化があった。
それまで滋子は、「もうわたしがお話しすることはありませんから」と答えてきた。相手がどんなに食い下がっても、それで受話器を置いてきた。が、今は違う。
「もし許されるなら、いつかわたし自身で書きたいと思いますから」
そう答えるのだ。ノアエディションの社長であり、滋子の永年のライター仲間でもある野崎英治は、初めてそれを耳にしたとき、「ああ、こいつ完全にトンネルを抜けたなと思った」と言った。
とはいえ、もう目を背けないという覚悟は、積極的に立ち向かうという宣言とは違う。滋子の仕事の日常は、ノアエディションの業務内で静かに安定していた。
だから、突然の電話の依頼に当惑した。事件ものだっていうのに、わたしなら力になれるって、どういうこと？
「萩谷敏子さんていう、五十三歳のお母さんなんですけどね」

滋子の不安をよそに、田口の電話の声は軽い。
「突然うちを訪ねてきて、ご自分の息子さんのことを記事にしてくれないかっていうんです。ま、いろいろヘンな人が押しかけてくるのは珍しいことじゃないし、このお母さんはとっても丁寧で真面目な感じの人なんで、僕もひととおり話は聞いたんです。けど……」
扱いかねる、というわけだ。
「うちが初めてじゃないんです。あっちこっち行って、みんな門前払いだったらしい」
「その方の息子さんて——」
「もう死んでるんです。この三月に、交通事故で」
滋子はちょっと眉を寄せた。
「その事故に事件性があったっていうことですか」
「いえ、そっちは純然たる事故。不可解な部分は何もないんですよ」
では、萩谷敏子という女性は、亡き息子の思い出話を記事にしてほしがっているのか。それがどうして「事件もの」になるのだろう。
「よくわからないなぁ」
「う〜ん、言いにくいんですよ」
自分は笑いながら、滋子には「前畑さん、笑いませんよね？」と問いかける。
「笑うも何も、話が見えないわ」
「すみません。ひと言で説明するとですね、萩谷さんは、亡くなった息子さんが超能力者だったって信じてるんです」
「——超能力者」

「そう、エスパーですね。いや、この場合は〝サイコメトラー〟と表現するべきかなぁ」
どっちであろうと、滋子には同じだ。
「それ何？」
「あ、知りません？　サイコメトラー」
特殊な能力を使って失踪者を探したり、殺人事件を解決したりするのだ、という。
「たいていの場合、失踪者や被害者の身の回りのものに手に触れて、そこから情報を引き出すんです。現場を訪ねて透視することもあるけど」
「千里眼てこと？」
「うん、まあそうですかね。でもその言葉はもう古いですよ」
「そんなこと、どうして知ってるんですか」
「前畑さんが何も知らないことの方が驚きですよ。テレビ、観ないんですか？　昨今、海外の有名なサイコメトラーが来日して、いろんな事件を解決してるんですよ」
バラエティーや情報番組の類だろう。滋子は、あの連続殺人事件以来、よほど必要に迫られたとき以外はテレビを観ない。裏も表も、もう一生分のテレビを見た気がしているからだ。
「だったらいっそ、そういうテレビ番組に話を持ち込んでみたらいいのに」
「ですから、そっちはもうあたってみたらしいんです。相手にしてもらえなかったんでしょう。肝心の息子さんが死んでるんじゃね」
滋子は受話器をいったん耳元からおろし、ため息をついた。それから言った。
「わたしもお役に立てないと思うけど」
「何も真面目に取り組む必要なんかないんですよ。ただ萩谷さんの話を聞いてあげればいいんで

す」
「それじゃ先方は満足しないでしょう」
「満足しますよ。大喜びでしたから」
「もうわたしの名前を伝えちゃったの？」
「いけませんでしたか？」
まったく悪びれていない。
「僕が勝手に持ち出したわけじゃないんです。萩谷さんの方から前畑さんの名前を出してきたんですよ。ああいう有名なジャーナリストの人に会えたらいいんだけどって。だから、前畑さんだったら紹介してあげられますよって言っちゃったんだけど」
腹立たしいというより、苦々しい。
「わたしじゃ無理よ。ごめんなさい」
早口にそう言って、滋子は受話器を置きかけた。それを察したのか、受話器から大きな呼びかけが洩れてくる。
「気の毒じゃありませんか。たった一人の息子さんを亡くして、独りぼっちのお母さんなんですよ。ちょっとぐらい話を聞いてあげたってバチはあたらないでしょう。萩谷さん、こういう取材とかのことを、何か探偵の調査みたいに誤解してるらしくて、お金を払うって言ってるし。前畑さんも小遣い稼ぎになりますよ」
バチはあたらないでしょう、だと？　自分の方こそバチあたりじゃないか。萩谷という淋しい母親に本気で同情しているわけでもないくせに。
それでも、滋子は受話器を持った手を宙で止めてしまった。

萩谷敏子は、話を聞いてくれるならお金を払うと言っているという。それはただの単純な誤解なのかもしれないが、誰かに――彼女がこれまでこの話を持ち込んだ先で、そういう考えを吹き込まれた可能性もある。
このまま放っておけば、どこかでもっと腹黒い人間にぶつかって、いいように毟られてしまうかもしれない。
それを見過ごすには忍びない。
有名なジャーナリスト、か。滋子はジャーナリストであったことは一度もないが、確かに一時期有名ではあった。もうみんな忘れていると思ったころに、それが蒸し返される。ツケだ。
だとすれば、少しぐらいの時間と手間を割いて、清算する責任があるだろう。
とはいえ、そんな気持ちを説明したところで、この電話の相手には通じまい。それが癪に障るので、口元をすぼめてしばらく思案した。何て言ってやろうか。
結局、「わかりました。萩谷さんの連絡先を教えてください」と言うしかなかった。
「このことに関しては、完全にわたしに任せてくださいよ」と、念を押す。
「任せるも何も、大助かりですよ。あれ？　でもそれってどういう意味ですか？　もしも面白い展開があっても、僕には報せないってことですか。そりゃないですよ、前畑さん」
「面白い展開なんかあるわけないでしょう」
今度こそ、ガチャンと音をたてて電話を切った。
教えてもらった連絡先は、携帯電話だった。気億劫にならないうちにと、すぐかけてみると、応答サービスが出た。滋子は名乗り、またかけ直しますと吹き込んだ。せめて一度でも話をしてからでないと、迂闊にこちらの連絡先を教えるわけにはいかない。

その日の夕方、もう一度かけた。また留守録だ。昼間は働いているのかもしれないと思って、夜八時過ぎにかけると、ようやく相手が出た。

「萩谷でございます」

「萩谷敏子さんでいらっしゃいますか」

「はい、左様でございますが」

「わたくしは前畑と申しますが」

とたんに、電話の向こうの声がぱあっと明るくなった。

「ああ、ああ、まあまあ！」

前畑先生ですね、ありがとうございます、という。飛び跳ねているのだろう。そんな様子が目に浮かぶような、はずんだ口調だ。

「あの、どうぞ前畑とお呼びください。わたくしは先生ではありませんので」

「まあ、そうなんですか。失礼いたしました。でも本当に、お電話ありがとうございます。こちらからお願いしましたのに、なかなかつながらなくて、ご迷惑をおかけいたしました。わたしスーパーで働いてるもので、勤務時間中はケータイに出られないんです」

電話の声と口調を聞いている限りでは、どこにでもいる近所のおばさんという印象だった。一人息子を亡くし、独りぼっちということだけど、夫はいないのだろうか。スーパーで働くことで、生計を立てているのか。

もっと詳しい話を聞いておけばよかったのだが、後の祭りだ。滋子は、例の編集者から紹介を受けたことを説明し、噛んで含めるように言い聞かせた。

「わたくしが萩谷さんのお役に立てるかどうかはわかりません。実は、萩谷さんがどのようなご

希望をお持ちなのか、わたくしはあまりよく知らないのです」

「はい、はい。お忙しいのに、本当に申し訳ありません」

騒がしいほど熱心な応答だ。

「とりあえず、一度お目にかかってお話を伺わせていただきますが、わたくしが何かできるかどうかは、まったくお約束できません。それでよろしいですか」

「はい、もちろんでございます。ご無理を申し上げていることは、わたしも重々わかっております。先生にお時間を割いていただけるだけで嬉しいです」

声が震えている。滋子は引き受けたことを後悔し始めた。やっぱり、こういうのは苦手だ。あたしもよくよくのお人好しじゃないか。

どこで会おうかというと、萩谷敏子は、先生のご都合のよろしいところへ伺いますという。いえ、わたくしがお訪ねしますと言っても、いいえいいえ、そんなお手間はかけさせられません、わたしが参上しますと言い張って、どうしても聞かない。

仕方なく、翌日早々に、滋子は野崎に相談した。彼はあっけらかんと、

「ここで会えばいいじゃないか」と言った。ノアエディションには、いろいろと雑多なものに埋もれかけてはいるけれど、一応、応接スペースがある。

「うちの仕事じゃないのに悪いわ」

「そんな遠慮しなくたっていいのに」

井川恵が笑い出す。ノアエディションのもう一人の社員で、野崎にとっては生徒か弟子のようなライターだ。滋子より十五歳下だから、例の連続殺人事件が起こった当時、彼女はまだ花の女子高生だった。一連の事件の被害者のなかにも女子高生がいたので、事件には興味津々で、報道

を逐一追いかけていたという。
野崎に紹介され、初めて彼女に会ったとき、あまりにもしげしげと観察されるので、滋子はいたたまれなくなった。と、恵は大いにうろたえて、すみませんすみませんと謝った。
「でもあたし、前畑さんのこと尊敬してます」
皮肉ではなさそうだった。恵の目は澄んでいた。
「野崎さんから、いろいろ聞きました。大変でしたねなんて言葉じゃ足りないくらい、大変な経験だったと思います。わたしじゃ想像しきれません。でも前畑さんは、あの状況で、前畑さんができる精一杯のことをしたと思います。あたし、それを尊敬してるんです」
もう一度すみませんと謝ってから、
「いっぺんだけ、それを言いたかったです。二度と言いません。これからよろしくお願いします」
手を差し出した。握手しようというのだ。滋子は素直に従った。以来、一緒に働いている。ライターとしては後輩だが、ノアエディションの社員としては、恵の方が先輩だ。滋子にはブランクもあったし、彼女に教わることは少なくない。
「ここへ呼んじゃっていいかしら」
「危険人物じゃないんだろ？　いきなり刃物振り回すようなさ」
「でも、変わった人だとは思うわよ」
サイコメトラー云々の話をすると、野崎は苦笑し、恵は手を叩いて喜んだ。
「いいなぁ、そういうの。ちょっと面白そう」
「ケイちゃん、代わってくれない？」

「代われないけど、手伝いますよ」
「安請け合いするなぁ。本気ぃ？」
「自分だって安請け合いじゃねえか」
ちくりと、野崎に叱られた。
萩谷敏子の都合を聞き、野崎と恵のスケジュールにも合わせて、日時を決めた。予定どおりに進めば、最初の一時間ほどは、野崎と恵はそれぞれ仕事で出かけており、滋子が一人で萩谷敏子に会う。そのうちに野崎たちが帰ってきて、滋子が手こずっているようなら加勢する、という段取りだ。
こうして、今日の会見となった。
萩谷敏子は、滋子が漠然と想像していたよりも、さらに「おばさん」風だった。今時の五十三歳は、滋子よりも若々しくお洒落な女性であっても不思議がない。が、敏子はそういう女性ではなかった。むしろ時代に逆行しているような五十三歳だった。化粧っけさえない。
敏子が遠慮がちに差し出した菓子折も、そんな彼女の風采と、ぴったり釣り合っていた。ありふれたチェーン店の、どこででも手に入れることのできるクッキーの詰め合わせだった。何のてらいも見栄もない。ただ、誰かを訪ねるときにはけっして手ぶらで行ってはいけないという、愚直な誠意がそこには見えた。
「ありがとうございます。皆でいただきます」
今さらのようだが、ここでは滋子一人ではないということを匂わせておいた。
道に迷い、焦ったのか、敏子は汗をかいていた。滋子がペットボトルから注いだ冷茶を、ありがたそうに押し頂いてから飲んだ。グラスをつかむ指は荒れていた。節々が太い。きちんと切り

そろえた四角い爪。働く女の手だ。それも、キャリアなどという言葉には置き換えられない労働をしている手だった。
「今日は、お仕事を休んでいただいたんですよね」
滋子の問いかけに、敏子はグラスを両手で頂いたまま、こくりこくりと上半身全体でうなずいた。口のなかの冷茶を大急ぎで飲み込む。
「は、はい」
「すみませんでした」
「いえいえ、とんでもないです先生、わたしこそご無理を申しまして」
滋子は微笑して、先生はやめてくださいと言った。
「ああ、そうですね、すみません先生」
無駄のようである。
「お住いは船山でしたよね？」
「はい」
「お仕事先のスーパーも？」
「はい、うちから自転車で通ってます。パートですから、時間は自由になるんです。シフトを決めて、ですから今日の休みも休みじゃないんです。夕方から出ますから」
「ああ、そうですか。近頃は遅くまで開いてるスーパーが多いですものね。わたしなんかとても助かります」
「うちも夜十二時までやってるんですよ。けど、九時より遅い時間帯は派遣会社から人が来てるので、わたしらみたいな直契約のパートは入れないんです。時給がいいから移りたかったんです

けども、派遣会社は歳に限りがあるんです」
年齢制限があるという意味だろう。
「それに、もうわたし一人になってしまったから、一人だけ暮らしていかれればよくなっちゃったもんで、時給もそんなもう、高くなくていいんですよねえ」
ふっくらと丸い頬をかすかに震わせて、笑った。
本題にかかるタイミングだ。滋子は敏子の方に、軽く身を乗り出した。
「息子さんのこと、お悔やみ申し上げます」
敏子はグラスをテーブルに置くと、両手を膝の上にきちんと揃え、ありがとうございますと、身体を二つに折ってお辞儀をした。滋子が困るほどに、長々と頭を下げていた。
ようやく顔を上げる。目尻が濡れている。
「すみません」
がま口型のバッグからハンカチを出して、目元を拭く。衣服と同じくらい地味で、ずいぶんと使い古しているらしい色褪せたハンカチは、しかし、きれいにアイロンがかけられていた。
「四十九日も過ぎたんですけども、等のことを考えると、すぐ涙が出てきてしまいまして」
泣き笑いしながらハンカチを使う。
「でもねぇ、嬉しいんです。これは嬉し涙です。出がけにね、等に声かけてきました。前畑先生がお母ちゃんと会ってくださるよ、あんたの話を、先生が聞いてくださるからねって。等も喜んでました。写真がね、いつもの顔よりも、もっと笑ってましたから」
滋子は口元で少しだけ微笑んだ。この人の息子なら、もういい大人だろうに。お母ちゃん、か。
「交通事故だったそうですね」

「はい。トラックに撥ねられましたんです。ほとんど、あの、何というんでしょう」
目尻からまた涙が溢れる。
「すぐ亡くなったようなんです。一応、救急車で病院に運んでもらったんですけども、もうどうしようもなかったようでした」
「――お気の毒です」
ありがとうございます、ありがとうございますと頭をぺこぺこさせて、涙を拭き洟をすする。
「卒業式も入学式も、どっちも楽しみにしてたんですよ。制服は、今でもあの子の机の脇に吊るしてあります。袖丈と裾を上げるとき手を通したきりになってしまって。お棺に入れるときに着せますかって、葬儀屋さんは言ってくださったんですけど、あの子の気に入ってたシャツとズボンがありましたんで、そっちを着せました。制服は、ずっととっておこうと思ってます」
滋子は当惑した。制服？　入学式？　この人の息子の話だろう？　孫じゃなくて。
「ちょっとねえ、落ち着きのない子だったんです。道を渡るときはよく気をつけなさいよって、わたし、いつも言ってましたし、先生も注意してくだすってました。でも仕方なかったんでしょう。等はいつもこう、わたしには思いもつかないようなことで頭がいっぱいでしたから。事故のときも、赤信号を見てなかったんですね。何か別のことを考えてたんでしょうねえ。それで、ふらふらっと飛び出してしまったんだと思います」
まるっきり子供の話ではないか。
「あの、息子さんはその、お一人だったんですよね」
本当に孫の話ではないのか確認するつもりで、遠まわしにそう尋ねてみた。
「はい、今はもう、集団登校とか集団下校とか、ないんですね。トラックに撥ねられたときは、

あの子一人でした。お友達は一緒にいなかったんです」
ティッシュを取り出して洟をかみ始める。滋子は、自分の誤解の原因に思い当たった。
「息子さん――等君は、亡くなったときおいくつだったんですか」
「十二歳でした」
答えて、ようやく敏子も滋子の困惑を悟ったらしい。あら、すみませんすみませんと、またにぎやかに謝った。
「わたし、四十を過ぎてから等を産んだんです。うんと遅い子供です。それご存知なかったら、わたしの歳が歳ですもの、先生ヘンに思われますよねえ」
「ごめんなさい。田口さんから、もっとよく話を聞いておけばよかった」
「いえいえ、とんでもないです」
丸めたティッシュを、敏子はがま口型のバッグのなかにしまいこんだ。
「等君にご兄弟は？」
「おりません。わたしら二人だけでした」
「ご主人は――」
「おりませんのです」
あっさり答えてから、バツが悪そうに下を向く。
「いろいろ面倒くさいことがありまして。でも先生にお聞かせするようなことじゃ……。わたしなんぞのつまらない身の上話になりますから」
そうですねとも言えなかったから、滋子は曖昧にうなずいた。
「お二人きりだったのじゃ、なおのことお辛いですね」

等を失い、萩谷敏子は、掛け値なしの独りぼっちになってしまったのだ。確かに、もう時給の多寡にこだわる必要も感じないだろう。
「にぎやかで面白い子でした」
敏子は小さく呟いた。充血し、しょぼしょぼした目が、思い出に明るくなっている。
「ちょっと変わってましたもんで、学校じゃずいぶんご迷惑かけて、先生にもご苦労が多くって。でも、優しい子でしたんです。わたし、楽しかったですよ」
そう、変わっていたという話だ。なにしろ超能力者だったというのだから。それについてどう切り出そうかと滋子が思案しているうちに、
「先生はご結婚なすっていらっしゃるんですよね。お子さんは」
「いえ、いないんです。恵まれませんで」
案の定、また大騒ぎの謝罪が始まった。とうとう滋子は笑ってしまった。
「もう、謝ったりするのやめましょう。こうして初めてお目にかかってるんですから、お互いに知らないことが多いのは当たり前ですもの。ね？」
敏子も照れたように笑った。冷茶のグラスに手を伸ばしたが、空になっている。滋子は身軽に立ち上がり、ペットボトルを持って戻った。
「萩谷さんは、どうしてわたしのことご存知だったんでしょうか。やっぱりあの、昔の連続殺人事件の関連で？」
敏子はこっくりとうなずいた。「先生、テレビに出ておられましたね。先生がお書きになった記事とかも、わたし、読ませていただきました」
「ありがとうございます」

「辛い事件でございましたね」
「大勢犠牲者が出ましたからね」
「先生も大変な思いをなすったんでしょう」
「わたしはまあ、自業自得です」はっきり言って、滋子は敏子の目を見た。「ですが、いろいろ痛い勉強をしましたので、あれ以来、事件ものの取材はしていないんです。本も出していないし、その手の文章は一切書いていません。田口さんはそれをご存知のはずなんですが、萩谷さんにはそういうご説明がありましたか」
ごく正直に、敏子の顔には失望の色が浮かんだ。ただそれは、自分の期待が裏切られたという意味の失望ではなさそうだ。すぐにこう続けたから。
「先生のような方が書くことをやめてしまわれるなんて、もったいないと思います」
「そんなことないですよ。わたしはそれほどのもんじゃありません。そもそもジャーナリストじゃないですし。ですからそういう意味でも、萩谷さんのご期待に応えられるかどうか、心もとないんです」
はぁ……と、敏子はうなだれた。
「田口さんから聞いた限りでは、等君にはちょっと特殊な能力があった――萩谷さんは、そうお考えだそうですね」
滋子は慎重な表現を使った。敏子がまたぞろ騒いで、そうなんですそうなんですと飛びついてくるだろうと予想したからだが、それはあっさり裏切られた。敏子は身体を小さく丸めて、萎れたようになり、膝の上でもじもじと指を組んでいる。
「はあ、まあ、そういうことで」

「等君のことを取り上げてほしいと、テレビ局とか雑誌の編集部とか、いくつか回ってこられたとも聞いているんですが」
「いえ、それは……そうなんですけれども」
ますます困っている。
「実は、わたしには、よくわかりませんのです」
「わからない」
「はい。最初にそのことを言ったのは、秋吉さんで。あ、わたしと一緒にパートしてる奥さんなんです。等のことを話したら、萩谷さんそれは超能力よって」
よく調べてもらった方がいい、テレビ局に頼め、新聞社に電話しろと勧められたのだという。その奥さんはテレビの観すぎだと、滋子は内心で思った。
「で、実際にいくつかあたってみられた？」
「はい」
「でも良い返事はなかったんですね」
「はい。それより先生、まずなかなか会っていただけませんで。番組あてにお手紙も書いてみましたが」
「返事がない？」
「はい。皆さんお忙しいんでしょうから、仕方がないと思いますけれども」
ぽっちゃりとした手を口元にあて、考え考え、敏子は話す。ここにはいない秋吉というパート仲間の気分を害しないよう、一生懸命に言葉を選んでいるという感じがする。
「わたしは秋吉さんの言うように、等が超能力者に間違いないとは、ちょっと思えませんのです。

そんなこと、ねえ先生、そこらにころころ転がってることじゃありませんでしょう」
「そうですね」
「でも、不思議なことは不思議なんです。等のこと、ホントに不思議なんですよ。ですから、番組なんかで取り上げてもらいたいというよりは、本当のところどうなのか、どなたかこういうことに詳しい方に、よく教えていただけないかと、わたし思ったんですねえ」
けっして売り込んだわけではないのだ。滋子はほっとし、納得もいった。教えていただきたいという表現は、目の前にいるこの地味で淋しい母親に、とてもしっくりくると思った。
「そんな形で萩谷さんを――まあ、言っちゃなんですが焚きつけた秋吉さんは、手伝ってくれないんですか」
敏子は小さな目を丸くした。「まあ、そんなのはもう、あの人には関係のないことです。秋吉さんは言うだけ言ったきりですわ、先生」
だいたいいつもそうなんですと、声をひそめた。
滋子は笑った。「じゃ、わたしとのお話に、秋吉さんが加わることはないんですね」
「はい、もちろんです」
ああ、よかった。
「じゃあ、安心して伺えます。具体的に、等君はどんな不思議なことをしたんですか」
ひとしきり、敏子は返答に困ったようにそわそわした。言葉を選びかけては考え直し、やがて、やおらバッグを膝に載せると、ぱちんと蓋を開け、なかから一冊のノートを取り出した。
「これ、ご覧いただけますか」と、両手で差し出す。
「開けていいんですか」

「どうぞ、見てやってください。うちにはこういうのがいっぱいあるんですけど、とりあえず今日はひとつだけ持って参りました」
滋子はそれを膝に載せた。スパイラル綴じのありふれたノートだ。表紙を開くと、緑色のクレヨンで、「萩谷等」と大きく書いてあった。
間もなく中学校へあがろうという十二歳にしては、ひどく幼い筆致だ。全体に歪んで傾き、文字の大きさが不統一で、バランスも崩れている。今日日、小学四年生ぐらいでも、自分の名前ならば、もう少し上手に整えて書くのではないか。
次のページには絵が描いてあった。家と、人と、立木が二本。家は赤い三角形と茶色い四角形の組み合わせ。木は、茶色の一本線を太く描いて、その上に緑色の雲みたいにもくもくした塊を載っけてある。人は、おそらく自分と母親なのだろう、一人はスカートを履き、一人は半ズボンだ。ちょうど、トイレの表示のマークみたいな形状である。目鼻は黒い点と線でつけてある。
まるで幼児の落書きだった。
滋子は目を上げて、敏子の顔を見た。敏子はひとつうなずくと、
「等は絵が好きで、しょっちゅう何かしら描いておりました」と言った。「もっと小さいころは、壁でも床でも手当たり次第に描くんで、わたし毎日あっちこっち拭いて回っておりました」
滋子はうなずき返した。心に浮かんだ質問は、とりあえず舌の裏に押し留めておいて、次、次とページをめくっていった。
海の絵。山の絵。果物かごとリンゴ。猫や犬。鳥。飛行機や電車。どれもすべて、幼児のイタズラ描きのレベルだ。とても小学校六年生の描いたものとは思えない。
「等君はいつもこういう絵を？　というか、これは等君がいつ描いた絵なんでしょう」

「小学校六年生の絵には見えませんですよね、先生」
「え、ええ、まあ」
先回りされて、滋子はたじろいだ。
「でもそれ、等が今年になって描いたんです。いちばん最後のページが、亡くなる何日か前に描いたものです」
滋子はそのページを確かめた。これは――トラックだ。荷台の部分がコンテナ状になっている。車体は黄色く、コンテナ部分は銀色だ。運転席には黒いサングラスをかけた男性が座り、大きなハンドルに、グローブみたいに大きな手を乗せている。頭より手の方が大きい。こういうデフォルメも、ものの大きさの対比がまだよくつかめなかったり、つかめていても、細部を描いているうちに（指は丁寧に五本描かれ、ちゃんと爪もついている）、描き込んでいる部分だけサイズが大きくなってしまう幼児の絵にありがちなものだと思う。
「等を撥ねたトラックも、黄色だったんです」と、敏子が言った。「それとそっくり同じ形をしてました」
滋子は目を細めた。
「引っ越し屋さんのトラックだったんですよ。荷物をおろして帰るところで」
「運転手はサングラスをかけていた、とか？」
なぜかしら、敏子は申し訳なさそうに首を縮める。
「警察の方のお話ですと、そのようなんです。それで信号の色をちゃんと見なかったんじゃないかって、お調べがあったそうですから」
あわてたようにひらひらと手を振り、

「でも、結局運転手さんは悪くなかったんです。信号は青でした。等の方が、赤信号で飛び出したんです」
滋子はゆっくりと何度かうなずいた。絵のなかのトラックは走っている。タイヤがぐるぐる回っているように描いてある上に、風の流れを示す横線が何本も引っ張ってある。
「そうしますと……等君は、自分の事故を予知していたということ、でしょうか」
敏子がどう反応するかわからないので、そうっと差し出すように言ってみた。見ると、敏子も滋子の機嫌を計っているかのように、上目遣いになっているのだった。
「どう思われますか、先生」
「う〜ん」思わず、苦笑がこぼれた。「どうでしょうねえ。偶然てこともありますものね」
「そうですよねえ。引っ越し屋さんのトラックなら、事故の前にも見かけてることだってありますでしょうしね。なにしろ三月でしたから」
異動と引っ越しの季節だ。
「でも、これを見て」滋子は指で絵のなかのトラックを指し示した。「秋吉さんは、等君が超能力者だと言ったんでしょう？」
田口の電話から今日の会見までの間に、滋子は下準備のつもりで、何冊か本を読んだ。スーパーナチュラルな事象を扱った記録本や、超能力者としてメディアで有名になった人物の評伝や自叙伝などだ。もちろん、にわか勉強である。が、未来予知のできる能力（そんなものが本当にあるかどうかは別として）と、田口が電話で話していた「サイコメトラー」の能力とは別物だということぐらい、今では滋子も理解している。
「いえ、それはまあそうなんですけれども、それだけではなくて」

敏子はハンカチで、今度は涙ではなく汗を拭いた。
「すみません、わたしは話が下手で、よくわかりませんですね」
このトラックの絵はきっかけなのだ、という。
「秋吉さんて、いい人なんですよ。等の葬式にも来てくれたし、家が近所なんで、納骨までにも何度かうちへ来て、お線香あげてくれたんです。わたしが一人じゃ淋しいだろうって、話し相手になってくれまして」
そういう折に、敏子は彼女に等が描いていた絵を見せた。「もともと、不思議な絵だなと思ってましたもんですから、つい」
「このトラックが、等君を撥ねたトラックとそっくりだということが不思議だと」
「はい、それはそうなんですが、それ以前に先生」
こういう絵は普通じゃないんです、という。額にいっぱいの汗だ。
「普通じゃない？」
「はい。先生、等は、学校じゃこんな絵は描かなかったんです。美術の時間とかには、もっとちゃんとした絵を描きました。ああ、そっちも持ってくればよかったですね。比べたらよくわかるのに」
「なのに、家ではこういう絵を描いた」
「そうなんです。わたしもおかしいなあと思うから、等に訊いたんですよ。そうするとね、あの子言いました。こっちの絵は見て描いてるんじゃなくて、頭に浮かんだものを描いてるんだって。そういうときは、上手く描けなくてこんなふうになっちゃうんだよ、お母ちゃんて」
滋子は開いたままのノートブックを応接のテーブルに置くと、腕組みをした。

「見たものを描くときは――」
「上手いんです。スケッチなんかもう。美術の先生にも褒めてもらって」
「で、こちらは、頭に浮かんだものを描いたのだと」
「はい。幼稚園の子みたいな絵だって、自分でも思うんだって。嫌なんだけども、どうしてもこうなっちゃうって言いました」
「でも、描きたくて描いてるわけですよね？」
「それが先生、おかしいんです。等が言うには、ときどき、頭のなかがこういうものでいっぱいになって、ぐるぐるしてくるっていうんですよ。気持ちが悪くなるって。絵に描くと、そのぐるぐるがなくなるっていうんですね。だから描かずにいられないって」
少し、それらしくなってきた。
「なるほど。その話を聞いて、黄色いトラックの絵もそうやって描かれたものだと知ったから、秋吉さんは、等君が超能力者だったんじゃないかと言い出したわけですね？」
「そうなんです、そうなんです」
「等君本人は、こういう絵を描いた後、お母さんに何か説明したりしたことがありますか？」
「いえ、ありません。いえいえ、ありました。珍しい絵やヘンな絵だと、わたしがこれなぁにって訊きますわね。そうすると教えてくれました。いつもじゃなかったですけど。つまりあの、わたしが目に留めて、訊いたときにはです。すみませんわたし、話がごちゃごちゃ」
見ている方の目が回りそうなほど、敏子はめまぐるしく首を振ったりうなずいたりしている。
「いいんですよ、落ち着いてゆっくりお話ししましょう。このトラックの絵については、お尋ねになりましたか」

「気づかなくて、何も――」
返事がかすれて途切れた。気づいていれば、もっと注意することができた。身を噛み骨を砕くほどの深い後悔が、声のなかに滲(にじ)み出ている。
「大丈夫ですか」
「大丈夫です」ハンカチで顔を半ば隠し、萩谷敏子は目をつぶっている。「すみません、取り乱しまして」
滋子は生温(なまぬる)くなってしまった冷茶をひと口飲み、もう一度等のノートブックを手に取った。
「それで、あの」敏子はハンカチを握り締めている。「等の描いたこういう絵を、もっとよく見てみた方がいいって、秋吉さんが言いまして」
「他にも何かあるかもしれないというわけですね」
「はい、それで先生、それの最初の方をめくってみていただけますか。二、三ページ目だと思うんです」
差し伸べる指が震えている。滋子はページを繰った。
「あ、それです！」
家の絵だった。ページの真ん中に、やっぱり三角と四角を組み合わせた形の、簡素な家が描いてある。ただ、さっき見た絵と違い、屋根は灰色、家は茶色で、さらに大きな窓があった。その窓の奥で、女の子が眠っている。
もっとも、描写としては、横になっている、転がっていると表現するべきか。仰向けだが、目鼻はついていない。顔は灰色に塗りつぶされて、のっぺらぼうなのだ。それでも女の子だろうと見当がつくのは、服が真っ赤なワンピースであることと、髪が長いからだった。肩まで届くほどの

おかっぱ頭で、髪の色は茶色。家の壁よりも明るいブラウンに塗ってある。手足は棒切れのように真っ直ぐ描いてあり、関節も掌も指もない。やはり灰色だ。

そして、家の屋根の端には風見鶏がついていた。たぶん風見鶏だろう。位置からして他のものではありえない。が、たいそう風変わりだった。鶏ではなく、蝙蝠なのだ。紫色で、「バットマン」のマークみたいな形だ。

「この絵が何か」

問い返す滋子をじっと見つめて、萩谷敏子は喉をごくりとさせた。

「秋吉さんが、これは大変な絵だって言って」

「何が大変なんです？」

「その家は人殺しのあった家だっていうんです」

滋子はゆっくりと目を見開いた。「殺人が」

「はい。先生、覚えておいでですか。先月のことですけど、北千住の方で家が焼けて、その焼け跡を調べたら、地べたから骨が出てきたって事件がありましたね」

すぐには思い浮かばなかった。

「火事で焼け死んだ人がいたという事件ですか」

「いえ、違います。そうじゃなくて、その骨は、ずっと昔に死んだ、その家の娘さんだったんです。親御さんがその娘さんを死なせて、床下を掘って埋めて隠してたんですよ。それが火事になって初めて見つかって。でも、あんまり昔のことなんで、ホラなんですか、じ、じ」

「時効？」

「そう、時効です！　時効だから、警察も何もできなかったって。でも、親御さんは娘さんを殺

したこと、認めたんですよ」

滋子は片手を頬にあてて、唸った。そういえば、一時ニュースで騒いではいなかったか。

「等君が描いたこの絵は、その家の絵だと」

「はい！」敏子の声が大きくなった。

「秋吉さんがそう言ったんですか」

「間違いないっていうんです。蝙蝠の風見鶏があるから」

問題の家の屋根にも、まったく同じ蝙蝠の風見鶏がくっついているのだという。秋吉という奥さんは、その映像を何度も何度もニュースやワイドショウで見たから、確かだというのだ。

「等君もそういうニュースを見て、これ、描いたんじゃないですか」

髪が乱れるほどの勢いで、敏子は首を横に振った。

「違います先生。それは違います。等がこれ描いたのは、あの事件がニュースで流れるよりも、もっともっと前だったはずなんです」

「記憶違いじゃ……」

敏子は身を乗り出し、滋子の膝の上からノートブックを取り上げた。最後の方を開くと、滋子の前に突き出した。

「これ、見てください。これ。梅の花の絵です」

確かにそうだった。紅梅と白梅だ。ぐねぐねと茶色の枝が描いてあり、いっぱいに花がついている。正しいスケッチではないが、梅の花であることに間違いはない。

「等とわたし、水戸の偕楽園に遊びに行ったんです。二月の十三日の、日曜日でした。カレンダーにつけてあるから、間違いないです」

楽しく一日母子(おやこ)で過ごして、帰ってきたその夜、等はこの絵を描いたのだという。
「たくさんの梅を見たから、頭のなかが梅でいっぱいだって言いました。目の裏まで梅が咲いてるって」
敏子は前のページに戻り、蝙蝠の風見鶏のある家の絵を広げた。
「ね、先生。この家の絵は、梅の絵よりもこんなに前ですよ。梅の花の絵が最後の方なんですから、真ん中へんに描いてあるこの家の絵は、もっともっと前ですよ。でも、北千住のあの事件があったのは、四月です。わたし新聞で調べました。火事があったのは四月二十日の午前一時ごろで、骨が見つかったのは明るくなってからでした。新聞にちゃんと載ってます。ね？　先生。不思議でしょう。そんなころ、等はもう死んでました。お骨になってたんです。ニュース見て描いたんじゃありません」
敏子の勢いに、滋子はいささか気圧(けお)された。
「何でかわからないけど、あの子、ここの家にこの娘さんが死んで埋められてること、知ってたんです。それでこの絵を描いたんです。どうやって知ったかわかりません。だからあの子には、やっぱり超能力があったんじゃないかって、秋吉さんが。わたし、わたしそれで――」
煙草をふかしながら、野崎は萩谷等のノートブックに見入っている。さっきからずっと眺めているのは、あの梅の花の絵だ。
「どう思います」
滋子は尋ねた。恵は自分の机で頬づえをつき、二人を見比べている。
「どう思うも何も、ねぇ」

返事した拍子に、煙草の灰が野崎の膝の上に落ちた。
「シゲちゃん、どうするつもりなの」
「どうもこうも、ねぇ」と、滋子は彼の顔を見返す。「これじゃ禅問答ですね」
萩谷敏子との会見の後半には、お膳立てどおり、野崎と恵も立ち会う形になった。
二人ともそれぞれに、滋子がどんな形でこの来客（というよりも依頼人か）に手こずっているか、想定しながら事務所に帰ってきたのだろう。が、泣いたり笑ったりしながら「すみません」と「ありがとうございます」を繰り返す敏子お母ちゃんは、どうやら予想外のタイプだったようだ。
敏子の語る亡き等のエピソードに、恵は一度ならず涙ぐんでいた。野崎は非常に礼儀正しく敏子に応対し、混乱しがちな彼女の話を上手に誘導してくれた。
「あのお母ちゃんは、まあ、金めあてじゃないよな。有名になりたい症候群でもない。自分の息子をぱあっと売り出して――霊能者だか超能力者だか知らないが――オイシイ思いをしたいと思ってるわけじゃない」
「ええ、それは間違いないですよ」
滋子の言葉に、恵が頬づえを外して大きくうなずいた。
「あたしもそれに一票。実はちょっと心配してたんで、萩谷さんがああいう人でほっとしてるんです」
「心配？」
「うん。最初に持ち込まれた話だと、萩谷さん、滋子さんが有名なライターだから会いたいって感じだったわけでしょ。その前にはテレビ局とかにも行ってた。自意識過剰のガメツイ人だった

ら嫌だなあ、ヘタにかまうと面倒だし、断れば逆恨みされるしって、不安でした」
野崎が笑い出した。「おまえはね、そういう小心なところを何とかせんといかんよ」
「あら、心外ですね。あたし、経験から発言してるんですけど」
「本当に面倒な目になんぞ、まだ遭ったことねえだろが。恵は弱腰だからさ。シゲちゃんを見なさい。徒手空拳であんなでっかい事件にぶつかって、玉砕したんだぞ」
「ぶつかったんじゃなくて、巻き込まれたんです。それに玉砕なんて名誉ある終わり方でもありませんでしたね。一敗地にまみれただけでした」
滋子は几帳面に訂正した。
「それは失礼しました」
野崎がバカ丁寧に頭を下げる。恵は真顔で起き直り、片眉を吊り上げた。
「滋子さん、負けてなんかいませんよ」
「それは意見の分かれるところよね」
恵に微笑みかけ、野崎に言った。
「とりあえず、その女の子の遺体が発見されたという事件の報道を調べてみようと思うんです。その家の屋根に、本当にこんな蝙蝠みたいな形の風見鶏がついてるのかどうか。週刊誌のグラビアにでも載ったものだろうと思いますから、大宅文庫であたればすぐわかるでしょう」
「ネットじゃ駄目かい？」
「事件の大筋はわかるんですけど、写真は駄目。家が写ってるものもサイズが小さくて、屋根の風見鶏まで確認できないんです」
野崎は等のノートブックをめくり、問題の絵を広げた。

「紫色の風見コウモリ、か」
「あれ？　でもヘンですよね」恵が高い声を出した。「その家、火事で焼けちゃったんでしょ？新開の写真やテレビに映ったのは、焼け跡ですよね。だったらそもそも風見鶏が残ってるはずないですよ」
「もっと落ち着いてものを考えなさいよ」野崎が言う。「全焼とは限らんだろが」
「あ、そっか」恵はペロリと舌を出した。パソコンに向き合い、「滋子さん、調べたのどのニュースサイトですか」
滋子が教えると、恵はモニターに顔を寄せて読み始めた。
「ホントだ。この写真で見る限り、半焼けっていうか半壊って感じですね。屋根も半分残ってるわ」
寄り目になって、さらにモニターにくっつく。
「でも、う～ん、風見鶏は見えないなあ。屋根に何かくっついているようにも見えなくもないけどわかんないわ。写真の角度もよくないですね」
野崎が滋子に向き直る。「調べるってことはシゲちゃん、あのお母ちゃんの依頼を引き受けるつもりなのか」
滋子は首を振った。「まずは、ただ事実を確かめるだけですよ。勘違いってこともあり得るし」
「勘違い？」恵が首を傾げる。
「毎日たくさんの事件報道があるでしょう。そのせいで、記憶違いが起こってるのかもしれない」
もともとこの件は、かなりそそっかしい騒ぎ屋であるらしい秋吉という主婦が、敏子に風見蝙

蝙のことを吹き込んだから始まったものなのだ。
「そうだな。秋吉ってオバハンが、他の事件報道で見た家と、女の子の遺体が出てきた事件の家とを混同してるって可能性もなくはない」
「だけど、それぐらい二人で裏を取ってるんじゃないですか？」
恵の問いかけに、滋子と野崎は同時に「ない、ない」と否定した。
「素人さんはそういうことやらないんだよ」
「とは限らないけど、少なくとも萩谷さんと秋吉さんは、そういうタイプじゃなさそうよね」
「思い込み強そうだったもんなあ」
野崎がうなじをさすりながら困ったように笑う。
「もしも勘違いだったなら、等君のお母さん、がっかりするでしょうね」
感傷的な眼差しになって、恵が呟いた。この人にはこういう情に流されやすいところがあるんだなと、滋子は思った。悪い特質ではない。でも危ない。
「がっかりするとしても、間違いなら尚のこと、早くそう教えてあげなくちゃ」
「そうそう。ま、行きがかり上そこまでは付き合ってやるか」
「でも、ホントだったら？」恵が食い下がってきた。「本当にこの家に風見蝙蝠がついてるってことがはっきりしたら、そこから先はどうするんですか」
滋子は肩をすくめた。「どうしようかしらね。だって、それだけでは超能力云々の話に結びつかないもの」
「どうしてです？　偶然てこと？」
「あたしたちが知らないだけで、風見蝙蝠が割とポピュラーなものだったり、ホームセンターの

人気商品だったりする可能性もあるじゃない？　雑貨の流行って、とてもじゃないけどつかみきれないもの」
恵はくちびるを尖らせて、少し考えた。
「そうすると、等君は単に、事件とは何の関係もなしに、どこか他所で見かけたものを絵に描いただけだってことですか」
「そうね」
「でも、あの絵の家のなかには女の子も描かれてますよ」
「それこそ偶然」
「そうかなぁ！　だってお母さん、言ってたじゃないですか。滋子さんも聞いたでしょ」
もちろん聞いた。等君がこの家と風見蝙蝠の絵を描いた当時、何か話し合った記憶はありますか。この絵について、等君に尋ねてみたことはありますか。野崎がそう尋ねると、萩谷敏子は、待ってましたとばかりにこう答えたのだ。
「おかしな絵だったので、ハイ、わたし訊きました。これはどんな絵なのって。そしたら等、言いました」
――お母ちゃん、これ、悲しいでしょ。この女の子は悲しいんだよ。ここから出られなくて、ずっとずっと独りぼっちだから。
勢い込んでいる恵を宥めるつもりで、滋子は努めて口調を柔らかくした。
「ああいう証言は、あてにならないものなの。後付けの可能性が高いからね」
「後付けって――」
「後から記憶を作っちゃってるって意味だ」と、野崎が答えた。

「珍しいことじゃないよ。だからインタビューってのは難しいんだ」
どすんと椅子の背にもたれると、恵はわざとのように大きなため息をついた。
「なぁんかヤな感じ。二人とも意地悪だよ」
「ごめんね」と、滋子は笑った。
「謝ることねぇよ、シゲちゃん。こいつが甘すぎるの。ケイ、〝懐疑主義〟って言葉を辞書で引いてみな。〝科学的思考〟でもいいぞ」
恵は頬をふくらませた。「あたしだって、頭から超能力を信じてるわけじゃないですよ。これでも合理主義者なんですから」
野崎のからかいに、恵はムキになっている。
「でも、お母さんの気持ちを思うとね」
「そこなのよ」滋子はうなずいてみせた。「萩谷さんもね、本当は等君が超能力者だったかどうかなんて、どうでもいいんじゃないのかな」
敏子はただ、等のことを思い出していたいのだろう。それも一人で思い出を反芻するだけではなく、誰かと語り合いたいのだろう。誰かに、等がどんな子だったのか聞いてもらいたいのだろう。話題にしてもらいたいのだ。
だからこそ、秋吉というパート仲間の言葉にすがりついてしまったのだ。罪な話である。
「これは、萩谷さんの〝喪の仕事〟なんだろうと思うんですよ」
残された者が死者を悼み、その記憶を整理してゆくことで、喪失の傷を癒やし、愛する者の死を認めてゆく過程のことだ。
「だから、無下にはできないって気がする。しばらくのあいだ、一緒に立ち会ってあげたい。い

え、立ち会わせてもらいたいんです」
滋子の言葉に、野崎は呆れたように顎を伸ばした。
「付き合いがいいよ、シゲちゃんは」
「いえいえ、逆ですよ野崎さん。あたし――今までいっぺんもこういうことをしてこなかったですからね。あんな大勢の人の死に関わったのに」
野崎と恵は顔を見合わせた。
「あの連続殺人事件の時は、そんな余裕なんてなかったと言い訳することもできます。でもね、あれから九年ですよ。あの事件で大切な家族や友人や仲間を殺された人たちは、この九年間に、それぞれ苦しみながら喪の仕事をしてきたんでしょう。それでも、未だに終わっていないかもしれません。あの事件の犠牲者たちは、あまりにも残酷で意味のない死を強いられた人たちばっかりでしたから、九年ぐらいじゃ割り切れなくて当然です」
滋子はそれを見て見ぬふりをしてきた。自分にはもう関わる資格がないという「反省」を盾にして。
「だから、せめてもの罪滅ぼしっていうのも大げさだけど……」
滋子が口をつぐむと、二人も黙ってしまった。
やがてゆっくりと、野崎が口を開いた。「あんまり思い詰めるなよ」
「はい。大丈夫ですよ」
感謝を込めて、滋子は答えた。

前畑昭二が親から引き継いだ前畑鉄工所は、葛飾区の南部の町にある。この不景気のなかでも

堅調な操業を続けており、おかげで彼は毎日忙しい。平日は朝六時に起き出し、七時には工場に出てゆく。それでいて午後十時前に帰宅できることはめったにない。休日も、接待や付き合いで外出することが増えた。

二人は、滋子が例の連続殺人事件に関わるほんの少し前に結婚した。だから十年の結婚生活はそのまま滋子があの事件と衝突し、乗り越え、折り合いをつけてきた年月に重なる。事件の渦中にあったときには、離婚の危機にも直面した。

そのせいもあって、二人の生活の場は、十年の間に何度か移った。今は結局、昭二の両親の位牌を納めた仏壇を守って、彼の生家で落ち着いている。工場と同じ敷地内にあるこの家は、古びてはいるが6DKの二階家で、二階の一角には滋子の仕事部屋もある。が、ノアエディションの一員になり、毎日浅草橋まで通勤するようになってからは、その部屋はほとんど書庫と化して、滋子がそこに備えた机に向き合う機会はほとんどない。

昔は典型的な夜型で、午前零時を過ぎないと何も書けないタイプだった。今はまったく逆だ。朝、昭二を送り出し、掃除や洗濯を片付けて、午前十時までには出社する。夕方は、仕事の混み具合にもよるが、午後六時にはノアエディションを出て、買い物をしながら帰宅する。昭二の帰宅が遅くとも夕食は一緒にとるから、帰り道で恵とちょっとお茶を飲んだりして、空っぽのおなかを宥めておくことも多い。

校了日や納期の間際になると、徹夜仕事も珍しくはないのがこの業界だが、滋子はこれまで、ノアエディションに泊まり込んだことはなかった。夕食が駄目なら朝食、朝食が駄目なら夕食、どちらか一食は、必ず昭二と一緒にとるように努めている。

「そんなに無理することねえよ」と、言われたこともある。「遅くなったときは泊まっていいよ。

夜中の三時におまえが一人でこっちまで帰ってくる方が、よっぽどオレの心臓には悪い」

それでも滋子は、自分で決めたこの習慣を守るようにしている。遠慮や義務感ではなく、そうしたいからだ。生活のリズムは、自分で作らなければ出来上がらない。物書き稼業なんだから、昼夜逆転生活なんて当然だ、ぐらいに思っていた九年前の自分は甘えていた。昔は、ロうるさく小言を並べる姑や、不機嫌そうな舅を疎ましく思ったこともあったが、今になって振り返れば、前畑鉄工所という小船を操り、昭和という時代の荒波を必死に渡ってきた働き者の義父母の目には、滋子の仕事がうさんくさく見えるのは当然のことだったとわかる。義父母にとっては、額に汗し、身体を使うことのみが「労働」であって、滋子のライター稼業なんか、どんなに努力したってまっとうな仕事に見えるはずもなかった。滋子もまた、その溝を埋める努力をしなかった。

その日も帰宅すると、まず仏壇に向かい、「ただいま帰りました」と挨拶をした。いつもならそれだけなのだが、今日はちょっと気分が違い、そのまま座り込んで、義父母の位牌を眺めていた。

昭二は一人っ子である。舅にとっては頼れる倅であり姑にとっては世界でいちばん大切な愛し子だった。二人とも、どんなときでも昭二の味方をしたし、昭二が大事だった。とりわけ姑は、昭二の言葉を金科玉条のように仰ぎつつ、一方では昭二がまだ小学生であるかのように甘やかすという離れ業をしては、幾度も滋子の神経を逆撫でしてくれたものである。

あまりにそれが露骨なので、実家の母に愚痴をこぼしたこともある。母は、「男の子の母親は、みんなそんなもんよ」と笑っていた。

――そういえば昭ちゃんも、お義父さんお義母さんがそれぞれ三十過ぎての子供だったっけ。昭和一桁生まれの夫婦には、充分に遅い子供である。

――しかも一人息子だもん、格別可愛かったわけですよね、お義母さん。
自然と微笑んでしまった。
「今日ね」と、声を出して仏壇に語りかけた。「四十一歳でやっと恵まれた一人息子を亡くしたばかりのお母さんに会ったんですよ。ふっくらしてて、昔風の、いかにもニッポンのお母ちゃんて感じの人でした」
子に先立たれる悲しみは、親にしかわからない。望んでも子供に恵まれずにいる滋子には、想像することしかできない。
「いささか変わった話を持ち込まれたので、あたしで役に立てるかどうか怪しいんですけどね。ま、やってみます」
チンチンと鉦を鳴らして立ち上がり、夕食の支度に取りかかった。
十時半を過ぎて帰宅した昭二はご立腹だった。ぷんぷん怒りながら風呂に入り、ブリブリしながらビールを飲む。こういうとき、職住近接は良くないなと滋子は思う。帰宅するまでに頭が冷えたり、気分が切り替わったりすることがないからだ。工場で起こったトラブルを、昭二はそのまま持ち帰ってしまう。
何でも、お得意さんの発注に間違いがあって、できあがった製品が納められないのだという。発注間違いは先方の責任なのだが、向こうは永年の顧客の立場だから強気で、謝るどころか、ちゃんと確認しなかった前畑鉄工所が悪いと言わんばかりなのだそうだ。
「最初っから急ぎ仕事だったのに、もっと急いで作り直せっていうんだ。そのくせ、あっちのミスでできちまったブツの決済は渋るしさ。ねぎるんだぜ。酷いだろ？」
「理不尽な話だよねえ」

「なあ？　うちはいつだって、あんなとことの取引、切っちまったっていいんだ。先代からの付き合いがあるから続けてるだけでさ」
怒り晩酌なので量を過ごし、頭に血が昇っている分、アルコールも早く回る。昭二は早々に大いびきをかいて寝てしまった。滋子は萩谷敏子と等のことを話しそびれた。涙もろい昭二のことだから、きっともらい泣きしたことだろうに。
後片付けを済ませると、滋子は古い新聞を調べにかかった。前畑家では、経済紙と全国紙と、スポーツ新聞をそれぞれ一紙取っているのだが、幸い、古い家には空いているスペースがたくさんあるので、三紙とも最低半年分は取っておくようにしてある。ノアエディションのような仕事では、以前に一度だけ出た新聞広告が必要になったりすることが、存外あるものだからだ。
萩谷敏子の言葉に間違いはなかった。問題の火災は四月二十日に発生している。場所は足立区千住鳥居町というところで、火元の家を含めて三軒が全焼。二軒が半焼。ほぼ百六十平米を焼いた火災は、完全に鎮火するまで二時間を要したと、記事にある。春の夜の強風が災いしたらしい。火災の原因は煙草の火の不始末だ。
二軒の半焼を合わせて四軒が全焼したと勘定し、簡単な割り算で、一軒一軒がずいぶんと小さな家だとわかる。一軒あたり、せいぜい十二三坪だ。滋子は北千住あたりに土地勘はないが、似たような土地柄の葛飾に住んでいるから、見当はつく。古いタイプの木造一戸建てが密集している町筋なのだろう。
これだけでも、都内の火災としては見出しになるトピックだ。出火は午前一時。だから、火災についての記事は、二十日の夕刊社会面に小さくベタ記事で載っている。
が、同じ火災についての報道が、二十一日の朝刊になると、がらりと姿を変える。見出しも違

う。

「焼け跡から遺体発見　十六年前の失踪少女？」

「両親が殺害を自供」

「我が子を床下に十六年　〝時効〟に近隣住民困惑」

滋子はまず、恵が表現したとおり、半壊・半焼け状態の家屋の写真をチェックした。巨人がこの家の後ろ半分を踏み潰して通り過ぎて、前半分は傾き、ひしゃげた状態ながらもほぼ無傷で残っているという感じだ。後ろの部分は屋根まで焼け落ち、焦げた梁が突き出しているのに、前の部分は板壁が立ち、瓦もきちんと並んでいる。

新聞の写真は粒子が粗い。が、ネットで検索して見つけ出した写真とは違い、さすがに現物なので、問題の家の屋根の端っこ――家の正面だ――に、何か取り付けられているのがおぼろげに見て取れる。が、形まではわからない。町中で、鯉幟を立てるための金具を屋根に付けっぱなしにしている家を見かけることがあるが、それと似ている。

スポーツ紙の事件面ならもう少し大きな写真が出ているかとめくってみた。確かに紙面の三分の一を占めるほどのサイズの写真が載っていたが、焼け落ちた家の後ろ側を撮ったもので、屋根の部分は切れていた。少女の遺体が埋められていた場所に、白い人形が描いてある。

秋吉という主婦が見たのは、新聞の写真ではあるまい。週刊誌かテレビだ。やっぱり明日は大宅文庫詣でだなと思いながら、滋子は記事の本文に取りかかることにした。必要なだけの新聞を持って、台所のテーブルへと移動する。一応、記事から判る限りの事件経過を書き留めながら読んでいこう――と思って、ちょっと苦笑した。この感じ、懐かしい。

萩谷敏子は、「北千住の方で家が焼けて、その焼け跡を調べたら、地べたから骨が出てきた」

と言っていた。が、三紙をぶつけて記事を確認してゆくと、それは正確な表現ではないと判った。地元警察が焼け跡の地面を捜索したのは、両親が少女の遺体がそこにあると告白した後のことだ。自白が先だったのである。

出火は午前一時。強風により延焼し、鎮火したのが午前三時ごろ。そして「未明」――正確な時刻が記事のなかにないのは、調べきれないのか関係者の記憶が定かでないのかどちらかの理由によるのだろう――問題の少女の両親である土井崎元と向子夫婦が、火災現場付近の交通整理のため現場にいた千住南警察署の交通課員に、「十六年前に娘を殺し、家の床下に埋めた。骨があるはずだから掘り出してやってほしい」と告げた。全国紙と経済紙の記事にはこうあるが、スポーツ紙の方は、土井崎夫妻はまず火災現場にいた鳥居町の町内会長に告白し、その後、彼に連れられて警察官の元に赴いたということになっている。

夫妻はそのまま千住南警察署に連行され、係官に供述しているうちに、現場から少女と思われる遺体が出た。土井崎夫妻にはもう一人、殺害された少女の下に妹がいたが、彼女も事情聴取を受け、事件についてはまったく関知していないということで、二十日の午後には帰宅を許されている。

土井崎夫妻は、三日間、千住南警察署内に身柄を留め置かれた。その間に遺体の鑑定が進み、夫妻の供述どおり、少女が殺害されてから既に十六年が経過、刑事事件の時効成立要件である十五年を過ぎていることが確認されたので、解放されたのだろう。

もうひとつ、十六年近くのあいだ地中にあった亡骸を、なぜ記事では「白骨」とか「白骨化した遺体」と表記せず、ひたすらに「遺体」と記しているのか、その理由がわかった。

少女の遺体は、顔立ちまで充分判別できる状態だったというのだ。両足の一部こそ白骨化が始

まっていたが、残りの部分は見事なまでに屍蠟化していたからだった。
これにはたぶん、彼女を殺害した土井崎夫妻も驚いたことだろう。土井崎元は、最初に告白する時点で「娘の骨」という表現をしている。もう白骨になっていると思い込んでいたのだろう。
しかし、少女の身体はきれいに残っていた。死因は首を絞められたことによる窒息死と判明したが、解剖するまでもなく、首にはその痕が見てとれたというのだ。
滋子はメモを取る手を止めると、リビングの明かりを見上げて、眉をひそめた。
――目は開いていたのかしら。
つい、余計な想像をしたくなる。
土井崎夫妻は、最初はもらい火の被災者、次に殺人と死体遺棄の容疑者、最終的には、殺人事件の犯人と確定したが事件が時効ということで、記事の上での扱われ方が転々と変わっている。当初は姓名が書かれておらず、次にはきっちり書かれ、事件が成立しないとなると、全国紙と経済紙ではまた匿名に戻り、一部のスポーツ紙では実名が載ったままだ。
殺害された少女についても同様だった。「十六年前に捜索願の出されていた夫妻の長女」「失踪当時十五歳の少女」――「少女」の表記が、やがて「茜」という実名にとって代わり、また「少女」や「長女」に戻る。この事件が、何らかの形でこの三紙で報道され続けているあいだじゅう、匿名に伏されていたのは土井崎夫妻の次女、茜の妹だけである。
どのくらい歳の離れた姉妹なのかわからないが、姉さんの方が十六年前に十五歳だったのだから、今では、妹も立派に成人していることだろう。彼女の実名を記事に書かなかったのは、マスコミの見識といっていい。それでも地元の人たちはみんな知っているはずだし、彼女の今後の人生が根底から破壊されてしまったであろうことに変わりはないのだが。

新聞報道は五日間で止まっている。時効になった事件より、他に報道するべき事柄はたくさんあるし、殺人事件だけでも毎日のように起こるのだ。
土井崎夫妻と次女のその後は、少なくとも新聞紙面からは読み取ることができない。
土井崎茜は、殺害された当時、地元の中学校の三年生。非行少女であったらしい。夫妻はそれぞれに、
「娘の非行に手を焼いていた」
「このままでは先が思いやられると悩んでいた」
と、述べている。
夫の土井崎元は、「自分が娘の首を絞めた。女房は娘を押さえつけていただけで、手は下していない」
妻の向子は、「すべて二人でやった。下の娘は何も知らない。今までも気づかれることはなかった」
二人が茜を絞殺し、遺体を床下の地面に埋めて隠したのは、一九八九年十二月八日深夜から未明にかけてのことだ。この時、夫妻の次女は家にいなかった。夫は「親戚の家に遊びに行っていた」と述べ、妻は、「どこにいたのか記憶がはっきりしないが、家にはいなかった。友達のところに泊まっていたのかもしれない」という。
計画的な殺人ではなく、夜遊びから帰ってきた茜と喧嘩になり、それがエスカレートした挙句の行為だったと、夫妻は供述している。そして、茜を殺害してから三日後に、千住南署に捜索願を提出している。娘が家出して帰ってこない、と。
茜は以前にも家出したことがあり、夫妻が捜索願を提出するのは二度目のことだった。一度目

は茜が中学二年生の夏休みで、都心でフラフラ遊んでいたらしく、一週間後にケロッとした顔で帰宅した。夫妻は捜索願を取り下げた。

近所の人びとの談話も載っている。茜の非行は近隣では有名で、彼女は鼻つまみ者だったようだ。

「また家出したって聞いて、まったく疑わなかった。今度は帰ってこないかもしれないって、土井崎の奥さんが心配そうな顔をしてたのを覚えてます」

「今だから言えるけどあのころは私らも、学校の方も、茜ちゃんが家出してくれてほっとしてたところがある。土井崎さんが茜ちゃんで苦労してたのは、みんな知ってたし。誰も捜そうなんてしなかった」

茜の〝失踪〟後も、土井崎夫妻の暮らしぶりに変わりはなかった。夫はサラリーマン。妻はパート勤務。近所付き合いの良い夫婦ではなかったが、静かで目立たない住民だったという。

滋子はボールペンでこめかみを押さえた。

茜の殺害から、目くらましの捜索願提出までの三日間というのが気になる。大いに気になる。

この三日をどう解釈するか。土井崎夫妻の逡巡と受け取るか。それとも様子見と取るか。

十五歳の少女の親は、娘が帰宅しないという事態に、常識的にどう反応するものか。すぐにも警察に駆け込むものではないか。

が、茜は不良少女で〝前科〟もある。二年生の夏休みの一件だ。またケロリとして帰ってきたのでは恥ずかしい。ああ、そういうことだなと世間は思うはずだ。だからすぐには騒がず、わざと三日の間を置いた。またぞろお騒がせすることになるんだろうから、本当に面目ないんだけども、やっぱり心配だから届けだけでも——。

冷静だ。抜け目ない。

一方で、その三日間に地獄の苦しみを味わったはずだ。警察に行こう。捜索願を出すのではなく、娘を殺したと白状するのだ。その方がいいという思いに、揺れなかったわけがない。

だが、土井崎夫妻にはもう一人の娘がいた。自分たちが自首すれば、この子は殺人犯の子供になる。

まさか死刑にはなるまいが、自分たちが刑務所にいるあいだ、誰がこの子の面倒をみてくれるだろう。児童保護施設に送られることになるなら、あまりに不憫だ。

滋子の目には、この三日がその後十六年間の沈黙の素であるように見える。この三日ですべてが決まってしまった。隠し通そう、と。

しかし、それならばなぜ、土井崎夫妻は今になって告白したのか。火災で家が焼けたからといって、必ずしも地面まで掘り返されるとは限らない。半壊した家を解体し、建て直す段階にならなければ、誰もそんなことなど考え付かないだろう。猶予はあったのだ。

茜の亡骸が発見されるかもしれないという可能性を思うだけで、もう参ってしまったのか。まだ何とかなるとは思わなかったのか。

時効の成立を意識していたのか。今ならもう罪に問われる心配はない。次女も大人になった。大丈夫だと。この大きな秘密という重荷をおろそうと。

それよりも何よりも、どうして十六年の間に、茜の遺体をどこか別の場所に移しておかなかったのか。火災が起きたとき、土井崎夫妻の胸に、その後悔はよぎらなかっただろうか。

なぜ、自ら手にかけた娘の亡骸を床下に、十六年も同じ場所で暮らしてゆくことができたのか。

そのあいだには、楽しいこともあったろう。残った次女と家族三人で、笑い転げたこともあっ

たろう。一緒になって泣いたり、困ったりしたこともあったろう。次女の成長を喜んだことも、彼女の将来を心配したこともあったろう。

その足元には常に、長女の屍骸が埋もれているのに。

ポーンという涼やかな音がした。滋子ははっとして顔を上げた。リビングの時計が午前一時を報せたのだ。

この振り子時計は、義父母が結婚したときに買い、ずっと大事にしてきたものだ。手巻きの時計だが、今でもほとんど狂うことなく、正確な時刻に鳴ってくれる。

とんだ夜なべだ。もう寝まなくては。

自分で自分の額をぺたりとぶった。あたしったら、何やってるんだろう。この事件に興味を持ち始めている。

滋子さん、いい加減にしなさいよ。あんた、昔あれだけ痛い目に遭ったのに、忘れたのかね。義父母の説教が聞こえてくるようだ。

急いで新聞を片付け、明かりを消し、足音を忍ばせて、二階の寝室にあがっていった。昭二のいびきはやんでいた。布団を蹴り飛ばし、大の字になって熟睡している。

その隣に横になっても、尚もしばらく、滋子は眠れなかった。目を閉じると、萩谷敏子の泣き笑いの顔が浮かんでくる。

――等のことを考えると、すぐ涙が出てきてしまいまして。

失った子。今はもうこの世にいない、自分の分身。この手で守り育ててきたのに。

代われるものなら自分が代わって、その命を永らえさせてやりたかった。

親なら、誰しもそう願うだろう。心の底から、叫ぶように。

土井崎夫妻は、茜を思って泣いたことがあったろうか。茜の非業の死を、自らの手がもたらした死を、悔やんだことはあったろうか。

あれほどに悼まれ、悲しまれ、追憶される愛し子の萩谷等と、十六年間、誰も捜そうとしなかった土井崎茜。

今、誰か茜のために泣いている者はいるのだろうか。悼まれることのない死者に、行き場所はあるのだろうか。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。